引用文の構造と機能（その2）

——引用句と名詞句をめぐって——

砂川有里子

1. はじめに

「～と」の形を取る引用句は，ある場合，名詞句と格助詞によって構成される格成分と非常に似通った文を作ることがある。例えば，次のaは「～と」の引用句を伴う文であるが，同じような意味が名詞句の格成分をもつb文によっても表すことができる。

(1) a．彼にだまされていたと気付いた。
　　b．彼にだまされていたことに気付いた。
(2) a．何時に出発したかと問い合わせた。
　　b．何時に出発したかを問い合わせた。

「～と」を伴う引用文の構造と機能を明らかにしようと試みた前稿[1]に引き続き，本稿では上に見たような引用句と名詞句の違いについて考えて見ることにしたい。前稿では引用文の典型が「場の二重性」によって構成されているものであることを明らかにしたが，上例のa bにおける意味の差や引用句をとる動詞と名詞句をとる動詞の「重なり」，あるいは「ずれ」といった問題が，「場の二重性」という観点を導入することによってより明確に記述できるようになるということを明らかにするのが本稿の目的である。とはいえ「場の二重性」という概念は，それ自体として明確に規定されたものではなく，ましてや完成された理論的立場でもない。前稿末尾においても言及しておいたように，前段階的な作業としてさらに考察を深めなければならない数多くの不分明，未確定の要因をはらんでいることは認めざるをえない。本稿では，前稿において提出し，規定し得た限りでの「場の二重性」概念に依拠して論を進めるのではあるが，それとともに，現実の言語事象を分析する作業の過程において，「場

の二重性」概念それ自体を再吟味し，さらに明確な規定に到達するための基礎的な考察をも試みて行きたいと考えている。

2. 名詞句「～か／かどうか」との比較

まず始めに名詞句や引用句の中に「～か」あるいは「～かどうか」という形式が用いられる場合について検討して見ることにする。上例の(2)や次の(3)のような場合がそれにあたる。(2)の場合はａとｂの意味に大差がないように思われるのに対し，(3)のａｂは全く異なった意味として解釈される場合もある。

(3)ａ．何時に出発したかと聞いた。

ｂ．何時に出発したかを聞いた。

ａの「聞く」は「問う」の読みしかないが，ｂの「聞く」は「問う」のほかに「教わる」の読みも可能である。この後者の読みの場合はａとは全く異なった事態について述べていることになる。ここで問題にしたいのは，「何時に出発したか」という形式が，ａ文で使われた時とｂ文で使われた時とで同じ意味を表しているのかどうか，またｂ文において，動詞が「問う」の読みをもつ時と「教わる」の読みをもつ時とで，この形式の意味が変わるのかどうかということである。

当然考えられることは，同じ形式であっても引用句の場合と名詞句の場合とでは陳述の度合いに異なりがあるのではないかという点である。よく知られているように，引用の「～と」はその前に文の資格のあるものを取ることができる。例えば「～と」の前は命令文であろうと感動詞であろうと，あるいは終助詞を従えた形式であろうと自由に現れ得るし，また話し言葉の場合は元の発話のアクセントやイントネーションなどの音声的な特徴を元の通りに再現して表現することも可能である。一方名詞句の場合は，もっぱら素材表示という詞的な役割を担わされていることから，陳述度の高い形式はその中に収まりえないだろうということが予測される。この予測が正しいことは，例えば，句内部の主語を「～は」で受けて主題化できるかどうか，句中に陳述副詞を用いることができるかどうか，あるいは「～だろう」などのムード形式を入れられるかどうかなどのテストをすることによって確かめることができる。

(4)ａ．飛行機は何時に出発したかと聞いた。

ｂ．*飛行機は何時に出発したかを聞いた。

(5)ａ．一体何時に出発したかと聞いた。

b．　*一体何時に出発したかを聞いた。

(6)a．何時に出発しただろうかと聞いた。

b．　*何時に出発しただろうかを聞いた。

引用句と名詞句とで上に見たような異なりがあると考えられるなら，たとえ表面的には同じ形式であっても，その形式が表している意味は異なっていると考えるべきではないだろうか。この点を明らかにするには，同一の形式が一方には使えてもう一方には使えない場合について検討してみるのがよいだろう。そこで次の例を考えてみることにしたい。

(7)a．誰が犯人かが分かった。

b．　*誰が犯人かと分かった。

名詞句を含む(7)a は自然な文であるが，引用句を含む(7)b は非文である。(7)b が成り立たないのは，引用句の部分に疑問文としての「疑い」あるいは「問い掛け」の意味が入り込んでしまうからであると思われる。「分かる」という動詞は「分からない状態から分かる状態への変化」を表しており，いうならば「疑問の解消」を意味しているのであるが，そのような語彙的な意味が引用句の表す「疑い」や「問い掛け」の意味と矛盾することになり，両者の共起を成り立たせなくしているのであろう。一方(7)a が成り立つのは，この名詞句に「疑い」や「問い掛け」が認められないためであると考えられる。この文は「犯人が分かった」「犯人の名前が分かった」などと近似した意味を表しており，そのことからも名詞句部分に「疑い」や「問い掛け」が欠如していることが分かる。強いて言うなら(7)a は「○○が犯人であることが分かった」とパラフレーズできるようなものである。そしてこの「○○」の部分は，この部分の情報が空白であること，すなわちこの部分が何であるかが「不定」であるという意味を表しているのだと考えられる。つまり(7)a の文は，まず名詞句によって不定部分を提示し，それに続く「分かる」という動詞によってその不定部分の不定性が解消されることを表すという関係になっているのである。ここにおける名詞句は一見疑問文と同じような形式をとっているように見えながら，単に不定の部分を明示するという機能をもつにとどまっており，疑問文のもつ「疑い」や「問い掛け」の意味は表していないと考えるべきである。

ここで先の(3)b の文に立ち戻ってみたいと思う。すでに述べたようにこの文には「何時に出発したか」を問う場合とそれを教わる場合の二つの読みが可能である。しかし，このどちらの場合も，名詞句自体は「○○時に出発したこと」とパラフレーズできるような一義的な意味を表しているのではないかとい

うのが筆者の考えである。つまり,「問う」と解釈出来る場合は不定の部分の情報を相手に求めたのであり,「教わる」と解釈出来る場合は不定の部分の情報を相手から得たのであって,どちらも名詞句内部の情報の一部が不定であることを一義的に表しているものであると考えられる。ただし「問う」の読みの場合には名詞句から「問い掛け性」を読み取ることが出来るように思えるが,ここに認められる「問い掛け性」は「聞く(問う)」という動詞の語義に求められるものであり,名詞句自体に「問い掛け性」が認められるわけではない。一方,「教わる」の読みの場合に「問い掛け性」が認められないのは,この場合の「聞く」の語義が「問い掛け性」とは無縁だからである。いずれにしても(3)b の文に二義性が認められるのは,「聞く」という動詞の二義性によるもので,名詞句自体は一義的に解釈されるとしてよいように思われる。

以上は wh 疑問文の例であったが, yes—no 疑問文の場合にも同じような差異が認められる。(8)a は yes—no 疑問文を引用した例であるが,この引用句に相当する名詞句は(8)b のように「〜かどうか」という形式を伴って表される。

(8)a. 仕事は終わったかとたずねられた。

b. 仕事が終わったかどうかをたずねられた。

(8)a の引用句は, yes—no 疑問文に伴う「問い掛け性」を保っている。一方(8)b の名詞句に表されているものは「仕事が終わったか終わらないか」のどちらかであるということ,すなわち「未定」の意味である。名詞句部分に「問い掛け性」があるかのように思われるのは,「たずねる」という動詞の語義によるもので,名詞句自体に「問い掛け性」が認められるわけではない。同じ名詞句でも次のような文脈で用いられれば,「問い掛け性」を読み取ることが出来なくなることからもそれは明らかである。

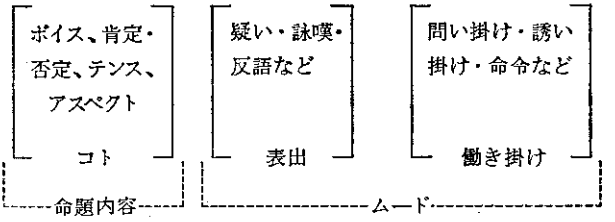
(9)a. 仕事が終わったかどうかが分からない。

b. 仕事が終わったかどうかを確かめる。

c. 仕事が終わったかどうかで決まる。

ところで,疑問文の構造はごく概略的に表せば次のようなものになる[2)]。

(10)



そしてこのような疑問文は「～と」の引用句として用いられた場合，独立文と同じように常に「表出」ないしは「働き掛け」といったムード的意味を表すことになるわけである。(7)bが非文になるのは，このムード的意味を排除することが出来ないためであるが，同じようなことは次の文が認められない場合についても言うことが出来る。

(11) *何時に出発するかと決めた。

(12) *彼が来るかどうかと知っている。

一方で，引用句の後ろに続く動詞が，このムード的意味と矛盾するものでない限り，どんな種類の疑問文でも正しく引用することが出来る[3]。以下，いくつかの例を挙げておくことにしよう。

(13) どれがいいかと聞いた。（問い掛け）

(14) やっぱりそうかと思った。（自問納得）

(15) 知ったことかとつぶやいた。（反語）

(16) 食事でもしないかと誘った。（誘い掛け）

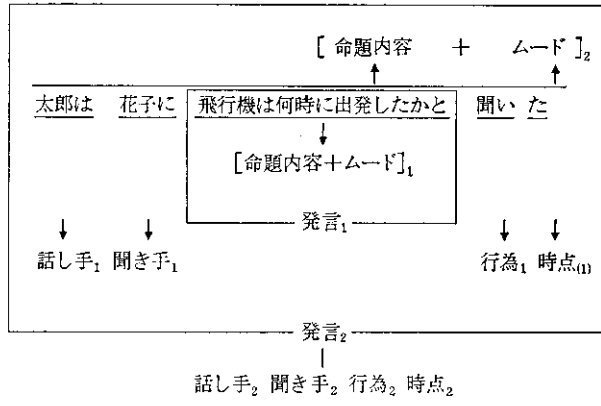
「～か」や「～かどうか」などは，形のうえでは疑問文と同じであるが，これらが名詞句の中に用いられた場合は疑問文の機能を果たし得ない。すでに述べたように，これらの形式は名詞句内部の情報が一部不定である，あるいは未定であるということを表すのみで，疑問文に見られるようなムード的意味は表すことができなくなっている[4]。つまりここにおける不定や未定は，上の図の命題内容の中に収まるものであり，命題内容の情報の一部が，不定，または未定の状態で空欄になっているということを表しているのである。

前稿で我々は引用文が典型的には二重の場によって構成されているものであることを確認した。前稿での方式にならって疑問文を引用した引用文の構造を記述してみるなら，次のようになろう。例として

(17) 太郎は花子に飛行機は何時に出発したかと聞いた。

という文を用いることにする。

(18)



この図は，(17)が太郎の発言の場（発言$_1$）をこの文の発言の場（発言$_2$）に取り込んだ構造になっている文であるということを表している。(17)における「飛行機は何時に出発したか」という表現は，「発言$_1$」の場における太郎の発言を「発言$_2$」の場において再現したもので，太郎の発言がありのままに逐語的に再現されたかどうかにかかわらず，太郎の発した文の持つ「命題内容」と「ムード」を忠実に映し出すものでなければならない。すでに述べたように引用句内の「～か」という形式は「疑い」あるいは「問い掛け」のムードを有している。(17)の引用句に認められるのは「問い掛け」であるが，ここに「問い掛け性」があるということは，すでにこの表現の中に問い掛ける主体（話し手$_1$）と問い掛ける相手（聞き手$_1$）の存在が前提されているということである。場の二重性とはこのように，発言$_2$の場において，発言$_1$の場を構成する諸要素（話し手$_1$，聞き手$_1$，発言$_1$の命題内容，その命題内容に対する話し手$_1$の心的態度）を取り込んだ形式として，発言$_1$が再現されることであると言うことができる。上の図の「〔命題内容＋ムード〕$_1$」における「命題内容」は太郎の発した文の命題内容を再現したものでなければならず，「話し手$_2$」による勝手な改竄は許されない。直接引用から間接引用へ移行する過程で，ダイクシスの転換や文体の変化が認められることが知られているが，そのほかにどのような変更が許容されるか，あるいはどこからが許容されなくなるかについて，筆者にはまだ明確な考えはない[5]。この点はおくとしても，直接引用であれ間接引用であれ，引用文は上述した二重の場によって成り立っているものであると考えられる。

引用句を伴う文が，上に述べたような二重の場によって構成されているのに

対し，名詞句を伴う文にはこのような二重性は認められない。

(19) 太郎は花子に飛行機が何時に出発したかを聞いた。

(20) 太郎は花子に飛行機が何時に出発したかを教えた。

(21) 太郎は飛行機が何時に出発したかを知らなかった。

(22) 太郎は飛行機が何時に出発したかを思い出した。

これらの文の「何時に出発したか」は，すでに述べたように不定の部分がどこであるかを提示する機能を果たしているのみで，「疑問」や「問い掛け」の意味は表していない。この場合，不定であるのは「飛行機の出発時間」であるから，「飛行機が何時に出発したか」という句は「飛行機の出発時間」とほぼ同義であると言うことができる。つまりこの句は「飛行機の出発時間」と同じように「○○を聞いた／教えた／知らなかった／思い出した」の「○○」の部分を特定するという機能を果たしているに過ぎない。従って，太郎の発言や思考の場はここでは介在していないのである。すなわち，これらの文は太郎の発言または思考の場に居合わせた主体（これらの文全体の話し手）が，そこで体験した出来事を，自らの体験として概念的に再構成したものであり，従って，これらの文には文全体の発言の場が関与しているのみで，太郎の発言または思考の場は介在していないと考えるべきである。これらの文は名詞句の命題が主文の命題の中に取り込まれているという意味においては二重の構造をなしているが，場の構図としては，一重構造をなしていると言うことができる。

3. 名詞句「～こと」との比較

「～こと」という形の名詞句が「～と」と対比されて論じられることがあるが，これらの名詞句も，一重の場から成り立っているという点で「～と」の引用句と区別して考えなければならない。が，その議論に入る前に，「～こと」と「～と」に関する先行研究について，とりわけ久野（1973）の考察について簡単に触れておくことにしたい。

久野（1973），Josephs（1976），McCawley（1978）は，「～こと／の」と「～と」を区別するものとして 'factive' という概念が有効であることを提唱している。この三者の基調となっているのは，久野による次のような指摘である。

「コト／ノ」で終わる名詞節は，その節が表す動作，状態，出来事が真であるという話者の前提を含んでいるが，「ト」で終わる名詞節にはそのよう

な前提が含まれていない。(久野 (1973), 137頁)

この仮説を支持するものとして，久野は例えば次のような例を挙げている。

(23) a．太郎は花子が死んだと信じなかった。

b．太郎は花子が死んだことを信じなかった。

aの場合は花子は死んだかもしれないし，生きているかもしれず，花子の死が事実であるという前提は含んでいない。しかしbの文では花子の死が事実であるという前提を含んでいる。一方で「『早合点スル』『言ウ』『勘違イスル』などの動詞は前提を含んでいないから，『ト』しかとることができない」として，次の例を挙げている。

(24) 太郎は花子が死んだと（*ことを*のを）早合点した／言った／勘違いした。

久野はさらに，「こと／の」をとる動詞の中に，話し手の前提とは全く無関係と思われる次のようなものがあることを指摘し，これらの構文に，名詞節のテンスが現在形でなければならないという共通する特徴があると述べている。

(25) a．私は泳ぐことができる。

b．英語を話すのはむずかしい。

以上が久野の説の概要であるが，この仮説にはいくつかの反例を見いだすことが出来る。それらの反例を議論するに当たり，リーチ (1981) による次のような動詞の分類を用いることにしたい。リーチは，述語が受ける句によって表される命題が，真であるという前提をもつかもたないかで，述語を factive, non-factive, counterfactive の3つに分類している。次の文を見てみよう。

(26) Marion realized that her sister was a witch.

(27) Marion suspected that her sister was a witch.

(28) Marion pretended that her sister was a witch.

(26)の文は 'Marion's sister was a witch' という前提があるが，それとは反対に(28)の文では 'Marion's sister was not a witch' ということが前提となっている。一方(27)の場合はそのどちらの前提もなく，that 以下の命題が真であるかどうかは問題となっていない。リーチは realize, suspect, pretend のそれぞれに代表される述語を，factive predicate, non-factive predicate, counterfactive predicate と名付けているわけである[6]。

さて，以上のリーチの用語を借りながら久野説に対する反論を試みることにしよう。これらの用語を用いて久野の仮説を言い換えれば，「～こと」や「～の」は「できる」「むずかしい」などの一部の述語を除き，基本的には factive

predicate とともに用いられ，「～と」はそれ以外の述語とともに用いられるということになる。しかし実際には，factive predicate でありながら「～と」をとり得るものも見いだすことができる。

(29) 花子が家を出たと知って，驚いた。

(30) 彼女は自分がだまされていたと気付いた。

(31) 無事着いたと分かってほっとした。

久野自身もこのことに気付いていないわけではなく，「唯一の例外」として「知る」を挙げている。しかし「知る」が「～と」を伴ってなぜ文法的な文となるのか，その理由については「明らかでない」としか述べられていない[7]。「知る」のみが例外でないことは上に挙げた例からも明らかであるが，この種の factive-predicate がなぜ「～と」を伴いうるのか，久野自身も認めているように，この問いに対して久野の仮説は十分な説明力をもち得ないのである。

久野に対する反例としては，さらに次のようなものも挙げることができる。

(32) 給食室から出火したことを想定して避難訓練を行った。

(33) 太郎は花子と会ったことを否定している。

(32)の場合は実際には出火しなかったと理解するのが普通だろうし，(33)の文から実際に太郎が花子と会ったのかどうかを問題にすることはできない。すなわちこれらの動詞は non-factive predicate に当たるわけであるが，上の例に見るように，これらは「～こと」を伴う場合もある。factive predicate でないのになぜ「～こと」をとり得るのか，久野の仮説では，この問いについても明確な説明はなし得ないのである[8]。

動詞が「～こと」や「～の」を取る場合にその句の命題が真であるという前提が伴うことは確かに多い。それに気付いたのは久野の慧眼であったと言えるが，真という前提が含まれ得るかどうかが「～こと／の」と「～と」を区別する基準となり得ないことは上述の反例で明らかであろう。そこで再び我々の議論に立ち戻って考えてみることにしたい。

引用句と名詞句との違いが形式のうえでも明確に現れている例として，次の文を検討してみることにしよう。これらの文は，今までに挙げた例とは違い，引用句と名詞句の内容が全く反対のことがらを示している。

(34) a．太郎は花子には会わなかったと否定した。

　　b．太郎は花子に会ったことを否定した。

(35) a．太郎は花子に会わなければよかったと後悔した。

　　b．太郎は花子に会ったことを後悔した。

(34)aの「花子には会わなかった」は発言$_1$の場における太郎の発言を再現したものである。一方(34)bの「花子に会ったこと」は太郎の発言内容を表すものではない。この句は，この文全体の話し手が体験した出来事を（たとえその体験が太郎が花子に何らかの発言をする場面を目撃したということであっても），太郎の発言の場とは独立した出来事として対象化し，概念的に再構成して表したものである。(34)aの「花子には会わなかった」が表す内容は太郎の発言の場に帰属するものであるが，(34)bの「花子に会ったこと」が表す内容にはそのような帰属先を認めることはできない。太郎の発言の場には帰属していない，それとは独立の「出来事」として表されているわけである。(34)のaとbと同じような対応は，思考を表す引用句についても観察できる。それが(35)の例である。

(35)aの引用句は，太郎の思考内容を再現したものとしてその思考の場に帰属しているが，(35)bの名詞句にはそのような帰属先が認められない．bの文は「太郎が花子に会った」という出来事に対して太郎が後悔の念を抱いたことを表しているのであって，その出来事に思考主体としての太郎の存在は関与していないのである。このbの場合には名詞句の表す命題が「真である」という前提が認められる。あることがらを対象化・客観化して，真であることがら，すなわち「事実」として捉えているわけである。述語が「事実」をあらわす句を受ける場合に「〜こと」が現れやすいのは，対象化・客観化されたことがらを表す「〜こと」の機能によるものであるが，一方で，対象化・客観化されたことがらが必ずしも常に「事実」として捉えられるものではないということも忘れてはならない。factive predicate 以外の動詞が「〜こと」をとり得る例を先に見たが，それは「事実」以外にも対象化・客観化され得ることがらがあることを示しているのである。

引用句が元の発言や思考が行われた場とかかわっており，名詞句がそうでないというのが本稿の主張であるが，この違いは以下に述べる現象によっても確認することができる。

まず，「つぶやく，叫ぶ，喚く，どなる」などの，発言の様態を表す動詞について考えてみたい。これらの動詞は「小さな声で／大きな声で／感情的になって／怒りにまかせて（発言する）」などと言い換えられるように，発言という行為を表すとともに，その行為のあり方，あるいはその行為主体の心的なあり方をも指し示している。つまり発言の場の状況設定ともいうべき機能をも合わせ持っているわけである。これらの動詞は次に見るように，「〜と」を受けることは出来るが，「〜こと」を受けることはない。

(36) a．被告人佐野ミキが妊娠していると法廷で叫んだのは，ミキの叔母にあたる今泉信江さんです。（事件40）

b．*被告人佐野ミキが妊娠していることを法廷で叫んだのは，……

(37) a．救急隊長は男の心臓に耳を当て，手首を取って，「まだ脈がある」とつぶやいた。（紅173）

b．*……まだ脈があることをつぶやいた。

(38) a．とにかくあたしはこのとおりの気性だから，約束が違うと喚いたわけだ。（闇163）

b．*……約束が違うことを喚いたわけだ。

発言の場の状況を指示するという機能が，発言の場とはかかわらない「～こと」をとることを妨げているわけである。この種の動詞は，このほかに「あえぐ」「ささやく」「どもる」などがある。

また，「威す，脅迫する，警告する」など，発言を通じて相手を脅かしたり，相手の注意を促したりすることを表す動詞も「～と」としか共起しない。これらの動詞は，発言のみならず発言のもたらす効果，すなわち発語媒介行為をも同時に表すものである。ところで発語媒介行為というのは，発言の場によってしか決定し得ない行為であるという点で，発言の場とはきわめて緊密な関係を有している。ある発言が，その発言の聞き手にどのような効果を与え，その聞き手にどのような行為を促すことになるかは，その発言の場における話し手と聞き手との関係，あるいはその時点での社会通念や話し手の立場などに関する聞き手の知識，そのほかその場におけるさまざまな状況によって決まるものである。先の動詞は単に発言を表すだけでなく，発言の場の状況によって決定される発言の効果をも表すのであり，そのために発言の場とは密接なかかわりをもっている。これらが発言の場を再現する機能をもつ引用句とは共起するが，その機能をもたない名詞句とは共起できないのはそのためであると思われる。

(39) a．警察に知らせたら息子を殺すと脅迫した。

b．*警察に知らせたら息子を殺すことを脅迫した。

(40) a．一人で出掛けないほうがいいと警告した。

b．*一人で出掛けないほうがいいことを警告した。

一方思考の場と極めて強く結び付く動詞として「錯覚する，思い違いする，思い込む，勘違いする，早合点する」などを挙げることができる。これらの動詞の表す意味に共通することは，錯覚されたり思い込まれたりする内容が，錯覚したり思い込んだりする主体にのみ帰属するものであるということである。

すなわちこの内容は，思考の場を離れては存在し得ないもので，思考の場がこの内容の存在を規定する重要な要素となっているわけである。これらの動詞も思考の場を再現する引用句としか共起しない。

(41) a．従って，被告人は結局このままでは自分の歌は，被害者の妻に渡されてしまうと思い込んだのであります。(事件87)

b．*……被害者の妻に渡されてしまうことを思い込んだのであります。

(42) a．花子は自分が嫌われていると勘違いした。

b．*花子は自分が嫌われていることを勘違いした。

これらの動詞がとる句の命題は，確かに久野の言うように「真である」という前提は含んでいない。しかし，(41)(42)の文が話し手の前提と無関係なのかというとそうではない。反対に，これらは引用句の表す命題が「真ではない」という前提を含んでいるのである。(41) a には「被告人の歌は被害者の妻に渡されない」という前提があり，また(42) a には「花子は嫌われていない」という前提があるわけである。リーチの分類に従えば，これらの文に用いられているのは counterfactive predicate であるということになるが，この種の述語が「～と」しか取れない理由は，「～と」の句が「真である」という前提を含まないからではなく，「真ではない」という前提を含んでいるということと関連しているものである。すでに述べたように「～と」の句が表す内容はそもそもその句を思考した主体にのみ帰属するものである。一方「思い込む」「勘違いする」などの述語は，思い込まれたり勘違いされたりする内容がそう思った主体にのみ帰属するものであることを表しており，「真ではない」という前提が含まれるのもそのような述語の意味にかかわって生じて来たものであると言える。このような述語が「～と」の句としか共起しないのはすでに述べたことから明らかであろう。

ただし，ある内容が思考主体にのみ帰属するものであれば，それを受ける動詞が常に counterfactive でなければならないかというと，そういうわけでもない。その例として「判断する」「解釈する」などの動詞を挙げることが出来る。判断や解釈というのは，きわめて主観的ないとなみである。そして，判断内容や解釈内容は特定の主体による判断や解釈という心的プロセスを経て初めてその主体に意識されるようになるものである。従ってそのプロセスを経ていない出来事として対象化・客観化し得るようなものではない。判断内容，解釈内容はこのように，それを下した主体にのみ唯一的に帰属するものであると言える。しかし同時に，その内容が真であるかどうかを問題にし得るものでもな

いのである。ある主体の判断したことがらは事実に即したことである場合もそうでない場合もあるはずである。これらの動詞は先のリーチの分類でいえば non-factive predicate に当たるものであるが，これらは non-factive であるとともに，その行為主体の思考内容が思考の場にしか帰属しえないものであるという点で思考の場ときわめて緊密に結び付いているのである[9]。これらの動詞も次に示すように「～こと」をとることはできないが，それはその思考内容の主観性のゆえに，対象化・客観化されることがらとしては捉えられないためであると思われる。そしてこの点は，「思い込む」「勘違いする」などの counterfactive predicate にも共通して見られる特徴である。

(43) a．勿論われわれは，胎内死亡とか，妊婦の健康状態から妊娠継続は不可能と判断したケースの，治療的流産に使用しているわけですが。(紅226)

b．*……胎内死亡とか，妊婦の健康状態から妊娠継続は不可能であることを判断したケースの……

(44) a．筆跡鑑定も予想はしましたが，田部自身が筆跡を紛らして書いたのかもしれないと解釈されれば，本人の字かどうか断定出来なくなるのではないかと考えた。(紅238)

b．*……田部自身が筆跡を紛らして書いたのかもしれないことが解釈されれば……

(45) a．いや，もしも二つの事件に繋がりがあるとすれば，穴吹夫婦が介在している可能性が濃厚だと，池袋署の捜査本部は睨んだ。(紅188)。

b．*……穴吹夫婦が介在している可能性が濃厚であることを，池袋署の捜査本部は睨んだ。

一方，広義の意味では思考にかかわるとも言える「忘れる」という動詞が「～と」をとれないことも「場の二重性」によって説明することができる。「忘れる」ということは，いったんは記憶にあったものが失われるということである。従って忘れたことの内容は，忘れた主体には帰属しようがない。忘れるという心的プロセスを経た瞬間にその主体の記憶からは消え去っているものである。思考の場を再現させる機能をもつ「～と」が記憶の消失を表す動詞と共起し得ないのは当然のことであると言えるだろう。

(46) a．相当の医院や病院へ快く出入りさせてもらうためには，看護婦の覚えを好くしておくことも忘れてはいけない。(紅210)

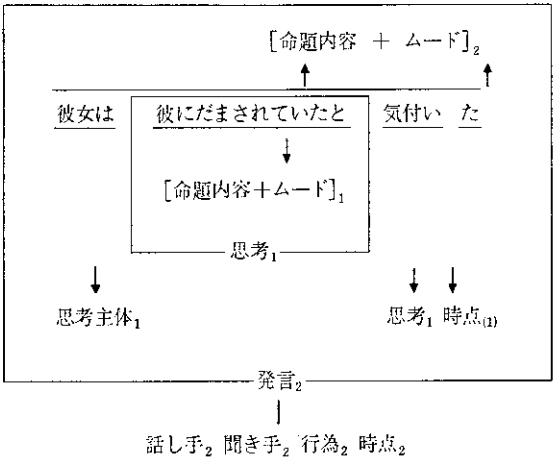
b．*……看護婦の覚えを好くしておくと忘れてはいけない。

factive predicate は「～こと」をとり[10]，counterfactive predicate は「～こと」を取ることができない。しかし，真であるという話し手の前提がなければ「～こと」が取れないというのではなく，「否定する」や「想定する」など，真であるかどうかを問題としない non-factive predicate の場合も「～こと」をとることができる。話し手によって概念化・客観化されたことがらは，真であることもあれば真でないこともある。そのどちらの可能性もあるからこそ，「～こと」は factive predicate とも non-factive predicate とも結び付き得るのである。

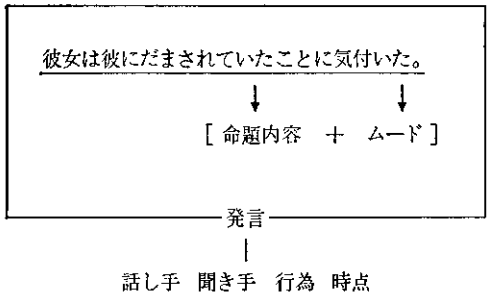
こうして「～こと」と「～と」の使い分けは，真であるという前提の有無によるのではなく，「場の二重性」という考え方を導入することによってより明確にその区別を議論の俎上に乗せることができると言えるように思われる。

最後に「～と」をとる文と「～こと」をとる文の構造を，前稿での方式にならって記述しておくことにしたい。

(47)



(48)



本稿では，「～と」をとる動詞や「～こと」をとる動詞の意味記述についての分析は，紙幅の関係もあってほとんど触れられなかった。また，引用動詞と引用句との結び付きの類型区分，またそれら諸類型と「場」の具体的な内容規定との相関性，あるいは場の再現の際における諸要素の変更可能性，等々，重要な先決問題が残されたままになっている。筆者としてはそれらの問題を念頭におきながら，当面の課題としては，場の再現の仕方の相違に関連して，いわゆる直接引用と間接引用の区別について，言い換えれば，場の二重性と直接・間接引用の区別との関係について考察を進めて行きたいと考える。

注

1） 砂川（1987）

2） 疑問文の構造については南（1985）に詳しく述べられている。本稿で用いた「表出」「働き掛け」という用語は南の用いたものを借用した。

3） 疑問表現のタイプについては仁田（1987）が参考になる。

4） 「～か」「～かどうか」という形式が格助詞を従えずに直接述部と結び付く場合の関係のあり方については藤田（1983）が詳しい分析を行っている。これらの形式は，句と述部との間に格関係を認められ，格成分と同じような機能を果たしているもの（藤田の考察は主としてこの場合についての分析である）から，格関係を認められず，一文の中で独立性を強くもつようになるものまである。次の (1)a は格助詞の「を」を補うことが出来るが，(1)b に格助詞を考えることは出来ない。

（1）a. どうしたらいいのか教えてくれ。

b. どうしたらいいのか，全く途方に暮れている。

これらの形式は，指示詞によって受けられるようになると，さらに独立性を強め，次の (2)b の例のように丁寧体が用いられるようにもなる。

（2）a. 先生に話したものかどうか，道々そのことばかり考えていた。

b. 機械の思考と人間の思考はどのように違うのでしょうか。今日はそのことについてお話ししたいと思います。

一方で，挿入句として半独立的に用いられる場合もある。

（3）a. 試合に勝つには勝ったが，練習不足だったせいか，もうひとつ意気が上がらなかった。

b. 部屋に入ると，何か言い争いでもしていたのだろうか，気まずい空気が流れていた。

本稿では，以上のような場合については扱っていない。「〜か」「〜かどうか」が述部との関係を断ち，次第に独立性を強めて行く現象は，「表出」のムードとのかかわりで論じるべき問題であると思われるが，どのような条件によって独立性が高まって行くのかについては稿を改めて論じることにしたい。

5） 鎌田（1983）は，独立文では「私が悲しがっている」という文が成り立たないのに，同じ形式を引用句として用いた文，「太郎が花子に，私が悲しがっていると言っていたんだよ（私＝この文の話し手）」は成り立つことを指摘し，通常の「間接引用句」とは別に「準間接引用句」という類を立てるべきであると主張している。しかし，引用文が二重の場によって構成されているとする筆者の論点からすると，このような例も他の間接引用文と同じ類であるとして差し支えないように思われる。つまり，発言$_1$の場における命題は「○○が悲しがっている」であり，発言$_2$の場においてもこの部分を変えることは許されない。この文においては，「○○」がたまたま発言$_2$の話し手であったために間接化の手続きに伴うダイクシスの転換により「私」が用いられたに過ぎず，単に通常の間接化の手続きに従っただけのものであると考えられる。「太郎が花子に，私が悲しいと言っていた（私＝この文の話し手）」は非文であるが，これは発言$_1$の命題内容を勝手に変えてはならないという引用文の規則を破っているからである。なお，この論点は，昨年の安井稔氏との談話において，氏が鎌田の例文に関して，「『○○』というブラックボックスの中にたまたま『私』という語が入ってきただけで，通常の間接話法と考えるべきである」と指摘されたことから大きなヒントを得たことを申し添えておきたい。

6） リーチ（1981）302頁

7） 久野（1973）139頁

8） (23)の例に関しては，次のような反例を考えることが出来る。

（1） 彼らは助けが来ることを信じてひたすら待ち続けたが，ついに助けは来なかった。

この文は，もちろん「〜と」を用いて言い換えることが可能だが，「〜こと」を用いても全く自然な文である。この文の話し手は，この文を発言する段階で助けが来なかったことはすでに知っているわけである。従って，助けが来ることが事実であるという前提が話し手にあったと考えることはできなくなる。それなのにここでは「〜こと」が用いられているのである。この点に対して，久野の仮説で説明が可能だろうか。

もっともこの文では名詞句に現在形が用いられているため，そのような場合に話し手の前提と関係ない場合があることを認めている久野の反例になり得ないという見方も成り立つかもしれない。しかし，その点については(32)と(33)を反例として挙げることができる。これらは名詞句に過去形が用いられているにもかかわらず，それが表す内容が真であるとの前提は認められない。

9) non-factive predicate であっても，すでに述べた「否定する」「想定する」などのように「～こと」をとることができるものもある。
10) factive predicate であっても，すでに述べた「知る」「気付く」「分かる」などのように「～と」をとることができるものもある。「～と」をとった場合は，対象化・客観化された出来事を述べたものではなく，思考内容を再現して述べているのである。

用例の出典

紅：『紅い陽炎』 夏樹静子著　新潮文庫　1986年
事件：『新・事件　断崖の跳め』 早坂暁著　大和書房　1984年
闇：『闇の梯』 藤沢周平著　文春文庫　1987年

参考文献

南不二男（1985）：「質問文の構造」朝倉日本語新講座４『文法と意味Ⅱ』朝倉書店.
仁田義雄（1987）：「日本語疑問表現の諸相」小泉保教授還暦記念論文集『言語学の視界』大学書林.
久野　暲（1973）：『日本文法研究』大修館書店.
Geoffrey Leech (1981) : *Semantics — The Study of Meaning* — (*Second edition*) Penguin Books Ltd.
Lewis S. Josephs (1976) : "Complementation" *Syntax and Semantics 5* Masayoshi Shibatani ed, Academic Press.
Noriko Akatsuka McCawley (1978) : "Another Look at NO, KOTO, and TO: Epistemology and Complementizer Choice in Japanese" *Problems in Japanese Syntax and Semantics* John Hinds and Irwin Howard ed., Kaitakusha.
藤田保幸（1983）：「従属句『～カ（ドウカ）』の述部に対する関係構成」『日本語学』第２巻第３号.
――（1986）：「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する―引用論の前提として―」『論集　日本語研究（一）現代編』宮地裕編，明治書院.
鎌田　修（1983）：「日本語の間接話法」『言語』Vol. 12, No. 9.
砂川有里子（1987）：「引用文の構造と機能―引用文の３つの類型について―」『文藝言語研究（言語編）』13，筑波大学文芸・言語学系.
J. L. Austin (1962) : *How to Do Things With Words*, J. O. Urmson ed., Harverd University Press.
Minoru Nakau (1973) : *Sentential Complementation in Japanese*, Kaitakusha.
井上和子（1983）：「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』Vol. 12, No. 11.
遠藤裕子（1982）：「日本語の話法」『言語』Vol. 11, No. 3.
廣瀬幸生（1986）：「発話動詞補文と話し手の主観的真為判断」『英語青年』10月号.
Senko K. Maynard (1984) : "Functions of TO and KOTO-O in Speech and Thought Representation in Japanese Written Descourse" *Lingua* 64.
―― (1986) : "The Particle -O and Content-oriented Indirect Speech in Japanese Written Discourse" *Direct and Indirect Speech* Florian Coulmas ed., Mouton de Gruyter.